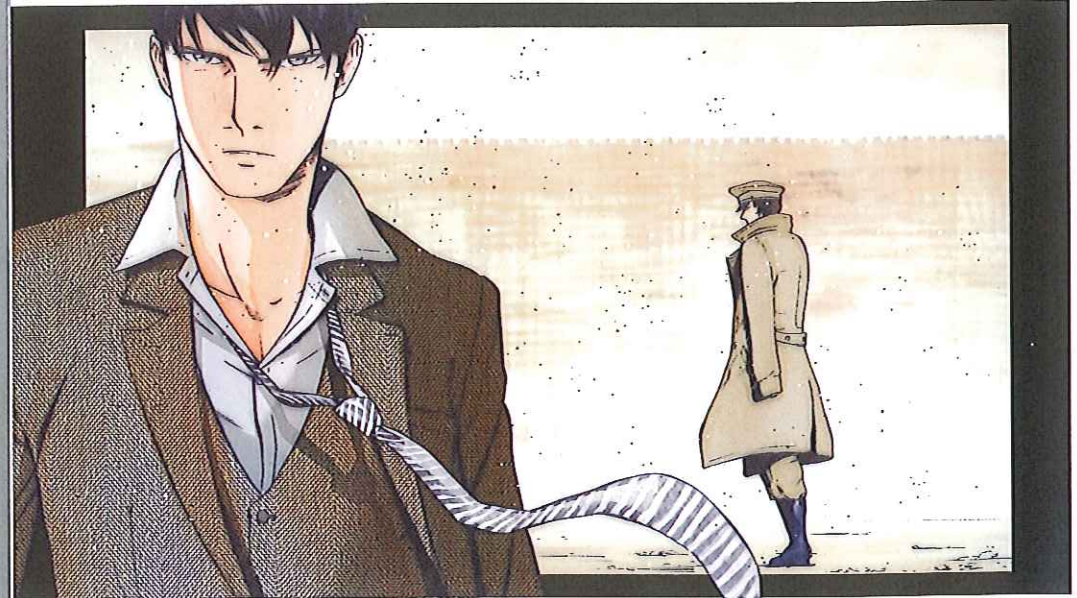


# 正論

SEIRON 10  
2016

## 小池百合子は正論で勝つか

井上和彦 / 猪瀬直樹



### 野党共闘の「被害者」、宇都宮健児、大いに語る

蓮舫代表で共産党と決別できますか? 長島昭久

チャンス到来! 北方領土返還の現実味 山田吉彦

新シリーズ 日本虚人列伝「瀬戸内寂聴」 小浜逸郎

人工知能 支配する民、支配される民

山海嘉之 / 古田博司 / 古是三春

特集

# 小池都知事は「正論」で勝てるか

## 民進党 長島昭久

衆院議員

### 連舫代表で 共産党と決別できますか？



野党共闘で臨んだ参院選と東京都知事選は残念ながら、敗北に終わった。民進党は野党共闘について「一定の成果あり」と総括したが、失ったモノは実に大きかった。「反安倍」で結集するため、「野党共闘ありき」で臨んだことは明らかに失敗であることが証明されたというべきだろう。都知事選では、野党共闘の枠組みを無理やり都政にはめ込もうとする戦略の結果、鳥越俊太郎氏という、知事候補としてとてもベストとは思

えないような人物を擁立してしまっただけで、都民に対する裏切りは甚だしいと言わざるを得ない。野党共闘とは何か。端的に言えば民進党の「他力本願」。ずばり言ってしまうえば共産党の主導だった。つまり、民進党が共産党を頼って闘ったということだ。

都知事選は共産党が主導し、街頭演説などでは動員された聴衆がプラカードを手に参加した。その前で演説していた鳥越氏本人は気分が良かっただろうし、動員され

た聴衆のみならずにも「炎天下に誠に「苦勞さま」と申し上げたいが、その様子を見ていたある人は「北朝鮮のマスゲームみたいだった」と感想を述べていた。多くの都民、国民はどう感じたか。考えるだけでもゾツとする。

少なくとも、わが党の岡田克也代表が必要以上に共産党に引つ張られた事実是否定できない。平成26年7月、当時の民主党の提言機関「党改革創生会議」（議長・船橋洋一元朝日新聞主筆）は、民主

党のあるべき姿をゴルフに例え、穏健中道のフェアウエード真ん中をとらえる国民政党にならなければいけない、と提言していた。しかし、いまの民進党が打ったボールは基本政策が異なる共産党に接近し過ぎた結果、どこへ飛んでいっているのか。遙か左のラフ。いや、政策によつてはOBになつてしまつている。私は体幹トレーニングを通じて党の軸を修正し、フェアウエード真ん中に打てる組織に変えたい。ゴルフは下手だが、党がど真ん中をキープできるような汗をかいていきたい。

### いまや主張は共産党と同じ

事の始まりは、昨年9月の安全保障関連法の成立だったといえるだろう。共産党の志位和夫委員長から「安保法制廃止の一点で野党で共闘しよう」と誘われ、当時は民主党の代表だった岡田さんが「重大な提案だ」と安易に乗ってしまった。選挙協力のメリットを重視した執行部が甘いささやきに耳を貸してしまったのだが、このとき、われわれは「基本政策が違う」と断るべきだった。

側聞するところによると、共産党は野党共闘について時間をかけて内部で議論を重ねていた。安保法案が採決されることを想定し、次の一手として「野党共闘」を戦略的に考えていたのだ。民進党はそれに乗ってしまった。

集団的自衛権行使を一部容認す

る法案審議が安保法制の戦後最大の大改革であったことを考えると、わが党が展開した「反対・違憲・廃止」の主張は野党第一党として無責任極まりなかった。責任ある野党として法案に修正を施し、成立に力を尽くすべきであった。それなのに、その反対の道を行き、最終的には「違憲一点張り」の共産党とほぼ同じ主張になつてしまったのだ。民主党が政権をとり、外交・安保政策をめぐり「現実」と向き合った3年3カ月は、いったい何だったのだろうか。

野党共闘の結果、参院選では、民進党が力を入れてきた政策もかすんでしまった。格差や貧困への取組み、経済成長と富の再分配。新たに投票権を得た18歳や19歳の有権者に向けて政策をつくってきたにもかかわらず、野党共闘による「憲法改正反対」や「改憲勢力3分の2阻止」といったスロ

長島昭久氏 昭和37（1962）年、横浜市生まれ。慶應義塾大学大学院法学研究科修士課程修了（憲法学）。平成15年の衆院選で民主党から出馬し初当選。当選5回。防衛政務官、首相補佐官、防衛副大臣などを歴任した。旧民主党、民進党で保守系を貫いている。石破茂前地方創生担当相や森本敏元防衛相との共著に「国防の論点—日本人が知らない本当の国家危機」。



「ガンにすつかりかき消されてしまったのだ。街頭遊説で思い出したように「われわれの政策は」と訴えても、ポジティブなメッセージとして伝わらない。「議席や比例票が増えた」と野党共闘を評価する方々は、このことをよく考へるべきだ。

平成21年に民主党が政権を奪った際に原動力となったのは、自民党だけに固執するのではなく、政策、人物本位で支持政党を選ぶ「保守的だけど、良識的」な有権者だった。「野党共闘」はそうした有権者を、われわれから離反させる結果に終わったのだと分析する。野党共闘の道は「万年野党」への道ではないだろうか。たとえ善戦はしても政権は奪えない。かつての社会党が自民党の失策で少しは議席を伸ばし、勢力が多少拮抗はしても、政権を奪うことはできなかつたように。私が問いたい

のは「本当にそれでいいのか」ということだ。

次の大きな選挙は政権を選択する衆院選だが、これを共産党と共闘することは絶対に関連していない。衆院選は参院選とはまったく質が違う。野党共闘の結果、参院選で議席獲得に多少の成果があったことは認めるが、参院選は政権の中間評価を問う選挙であり、極端に言えば、野党にとっては、政権にケチをつけていけばいいという選挙でもある。「憲法改正反対」「改憲勢力3分の2阻止」という、政権に対するネガティブなスローガンを掲げていけばよかった。しかし、衆院選は「私たちが政権をとつたらこういう社会をつくる。こういう未来をつくる」と、国民に対してポジティブなメッセージを発信していかなければいけない。その時に問われるのは主体性と独自色、独立独歩の姿勢

だ。「野党共闘の枠組みありき」で進めばメッセージは必ず濁る。

共産党は「自衛隊は違憲」「日米安全保障条約は解消」、さらに現在の党綱領では明言していないが、明らかに「天皇制は廃止」を考えているといつてよく、われわれとは基本政策が全く異なる。貧困や格差は正の解消などのテーマで共闘できる部分があることは否定しないが、政権選択の選挙を控えた今、外交・安保政策そして皇室についての考え方で相いれない政党と共闘すれば、有権者はどう思うだろうか。

### SEALDsと民進党の墮落

少し話は変わるが、安保法制論議では、反対する学生グループ「SEALDs（シールズ）」など多くの若者が注目されていた。そういういった若者たちの多くは、都知

事選で鳥越氏の支援に尽力した。

共産党は彼らとともに闘い、民進党の人たちも持ち上げていた。しかし、最近の国政選挙から都知事選に至るまでリベラル勢力は連敗していることを考えると、残念ながら彼らの訴えは国民の心に響いてはいない。

私は、学生という立場で街頭に出て、政治の課題について堂々と主張する姿は率直に評価したいと思っているし、行動力や発想は大きなものだとも思う。シールズの奥田愛基氏は純粹だし、正義感がある。しかし、それでも彼らの主張の内容には同意することはできない。

そのメッセージは日米安保条約改定に反対した60年安保闘争と、さして変わらない。「安保法制を整備すればすぐに戦争になる」「特定秘密保護法は平成の治安維持法になる」。こうしたメッセージ

ジは、昔の学生運動の現実離れした訴えを無批判で引き継いでいるようにも感じられ、どうしても稚拙に聞こえてしまう。

私たちが、あの年代の時にどれほど成熟な議論ができたかを反省すれば、その訴えに経験不足が反映されるのも仕方がないかもしれない。ただ、若者に便乗した政治家たちには大きな問題がある。なぜなら、国会議員はあのような若者の意見をくみ取りつつも冷静に議論をしなければならぬのに、それをしなかつたからだ。

安保法制に反対して大騒ぎしていた国会議員は若者に乗せられたというよりは、若者の動きを利用しようとしていた。これは国会議員の墮落ではないだろうか。当時の民主党も率先して利用していたと言わざるを得ない。共産党は昔からあのような運動を展開してきたのだから、天下の野党第一党

が若者を利用した事実は総括しなければならぬ。

### 蓮舫代表では…

民進党を共産党との共闘に走らせたのには、安倍晋三首相の側にも責任はある。何でもかんでも「民主党はダメだ」と決めつけ、「野党根性」を刺激するような言動はわれわれの神経を逆なでした。「そこまで自民党が民主党を追い詰めるのだったら安倍を倒してやる」と。党内で議論をしている。「こんな安倍政権のやり方でいいのか」という雰囲気は充満していた。私は「現実的に行こう」と言い続けたが、党論をまとめるまでには至らなかつた。

本来冷静な人物であるはずの岡田さんが、党代表として野党共闘へと走ったのにも、そうした安倍自民党への過剰な反発があつたよ

うに思える。党代表が乗り越えなければならぬ最大のイベントは選挙だ。政治は数が力。しかし、現在の党の力では、自分が代表の間に選挙で目に見える成果を出せるか不透明だ。かといって、いまから党を建て直す時間はない。岡田さんはそこまで考えた結果、「安倍政権を倒すためには、野党もまとまった方がいい」という結論にいたったのではないか。

ただ、民進党がやるべきは、自分たちを鍛え直すことだった。今から努力しても、正直言って結果が出るのは2、3年先で、安倍首相の総裁任期が終わった後だろう。しかし、2、3年は本当に苦勞し、専門家を集めてしっかりと政策を考え直すべきなのだ。

そのためには、今度の衆院選で、これまでの方針をリセットした上で臨むことが重要だ。まずは9月の民進党代表選では同じ志を

持つ仲間たちに賛同を呼びかけ、方向性についてオープンな場で議論がしたいと思う。その際には、「野党共闘」の失敗を反省することだ。そのためには、野党共闘を重視する岡田さんと、それに対立する候補が侃々諤々の議論をするという構図が分かりやすかった。私を含む路線転換を主張する勢力も一つにまとまったと思う。

ところが、岡田さんは出馬せず、岡田執行部の一員ながら、野党共闘には慎重な蓮舫代表代行が有力候補として出馬を表明したことで、構図は曖昧になった。彼女はリベラルに振れる一方、保守的な野田佳彦さんの派閥に属する。このままでは岡田執行部の失敗も曖昧にされたまま、新体制が発足するかもしれない。それでは民進党は、また共産党に引きずられることになるかもしれない。そうしないためにも、私はなんとかしな

ければならないと思っている。  
**民進党も憲法議論を**

いよいよ秋の臨時国会から憲法議論が本格化する。民進党が国民から責任政党だと認知されるためには、国家の根幹たる憲法から目を背けてはならない。ただ、現実には党内の憲法議論は停滞している。岡田さんが「安倍政権の間は憲法改正は議論もしない」と発言してしまっただけで、党の憲法調査会長も「安易に議論は始められない」という態度だった。しかし、議論にすら入らない頑なな姿勢はよくない。憲法改正議論には応じるべきではないだろうか。

思い出してほしいのは、民進党を構成する旧民主党と旧維新の党は憲法改正容認だったということだ。民主党は「創憲」を掲げていたし、民進党を立ち上げる際の基

本的政策合意には「時代の変化に対応した必要な条文の改正を目指す」とはっきり書いてある。ところが、岡田さんは今年4月に「民進党は民主党がかつて取りまとめた『憲法提言』を引き継いでいない」と明言してしまい、民進党は7月の参院選のポスターに「3分の2阻止」と大々的に明記してしまった。共闘関係にある共産党に配慮したのだろう。

自民党の憲法改正草案の評判はさまざまだが、少なくとも彼らは党内で侃々諤々と議論をしてまとめた。民進党が本当に政権を奪おうと思えば、多少遠回りをしてでも憲法の対案についても党内で議論すべきなのだ。そもそも、次の政権選択の衆院選で党の見解を問われるのは避けられないのだから、野党第一党として憲法も含む重要テーマの対案を持っているのは当たり前なのだ。

公明党は今後の改憲論議について「民進党も引き込まなければいけない」と主張している。これは「状況によっては民進党外しもやむなし」とも考えている自民党を牽制するシグナルであると同時に、民進党に対しては「もう少し現実的になれ。いつまでも共産党に気兼ねするな」というメッセージでもあるはずだ。

私は二大政党論者で、本来なら自民党と民進党はスムーズに政権交代を繰り返すことができると思っっている。自民党政権から民主党の鳩山由紀夫内閣への政権交代では米軍普天間飛行場移設などをめぐりドタバタがあったが、野田内閣からは現実的な政策がとられ、自民党の安倍政権への移行は極めてスムーズだった。

野田さんは中国を念頭に南西方面の防衛態勢を強化した。「法の支配」の重要性にも言及し、武器

輸出三原則の見直しも行った。私に安倍さんの外交・安保政策を一定評価するのは、野田政権の有用な政策を引き継いだからだ。私が一番好きな政治家、岸信介元首相も、あまり知られていないが、同じ二大政党論者だった。岸氏は与党と野党第一党の二つの山の裾野は重なっていると主張したという。私自身も外交・安保政策に象徴される裾野を意識しながら行動しているつもりだ。そうでなければ国民も安心して政権交代を選ばない。

現在の民進党は自公よりも、共産党と裾野が重なってきていないだろうか。これではなかなか国民は「政権を任せよう」とはならない。岸氏が残した政権交代のイメージを民進党はかみしめる必要がある。孫の安倍さんが政権を持っているこの時代に皮肉ではあるのだが…。